

『リア王』のテキストに見られる Speech Prefixの変更に關する一考察

辻 照彦

1 はじめに

シェイクスピアの『リア王』には、1608年に出版された第一・四つ折り本（Q）と、1623年の全集に収められた第一・二つ折り本（F）の2種類のテキストが存在する。四つ折り本には、韻文が散文として印刷されていたり、逆に、散文が韻文で印刷されているといった珍しい特徴があるため、それを説明するために、印刷原稿の由来として、観客が速記で書き留めた手稿であるとする速記説や、台本が手元になかった巡業中の役者たちが、記憶を頼りにまとめた手稿であるとする記憶再構成説が提唱されてきた。

書誌学やテキスト批評の面から研究が続けられてきた結果、現在研究者の中でコンセンサスとなっているのは、四つ折り本の原稿はシェイクスピア自身による自筆原稿、いわゆるfoul papersであり、二つ折り本の原稿は、四つ折り本の原稿となったシェイクスピアの手書き原稿を書記が清書して、それに上演のための修正が施された劇団の台本に基づくものとする仮説である¹⁾。これは『ハムレット』のQ2とFの関係と同じである。

『ハムレット』の2種類のテキストも、単語からパッセージのレベルまで多くの異同が存在することで有名である。しかし、それと比べても、『リア王』のテキスト間の異同は格段に多い。この異同の多さを説明するために、かつては速記説や記憶再構成説が持ち出されてきたのだが、2種類のテキストの起源が、『ハムレット』と同様、作者の手書き原稿と上演台本ということになると、『リア王』に『ハムレット』を大幅に上回る異同が生まれた原因について、新たな合理的説明を考える必要が生じてくる。

1980年代以降、Fをシェイクスピア自身による改訂版とみなす作者改訂説が盛んに提唱されてきた。シェイクスピアは、Qの基になった作品を1608年以前に書き上げたが、その数年後に大幅に書き換えたので、『リア王』の2種類のテキストには、現在我々が目にしているような多数の異同が生じてきたとするものである。作者改定説を支持する研究者が多いことは事実だが、それに対する根強い反論が存在することもまた事実である。筆者は作者改定説に懐疑的であり、『リア王』のテキスト問題には別の解決方法が存在すると考えている。

『リア王』のテキスト間の異同を大きくした原因の1つとして今までほとんど指摘されてこなかったものに、Qのテキストに加えられた編集の問題がある²⁾。出版の過程で、シェイクスピアの自筆原稿に様々な加除修正が施されたとする仮説である。筆者は、Fのみに見られるパッセージや台詞の頭書きであるSpeech Prefix（SP）の異同を検証する中で、従来指摘されてきたQ→F（QがオリジナルでFが修正後）という変更だけでなく、F→Q（FがオリジナルでQが修正後）という方向への意図的な変更の可能性があることに気づいた。本論では、『リア王』第一・四つ折り本の出版に当たり、シェイクスピアの自筆

原稿が何者かによって意図的に書き換えられていたことを裏付けるために、S Pに関する2つの異同例を分析したいと思う。最初に、5幕3場前半にある、リーガンとエドマンズのS Pが入れ替わっている例、続いて、1幕4場に見られる、リアとケントのS Pが入れ替わっている例を取り上げることにする。

2 5幕3場のリーガンとエドマンズのS P

5幕3場にはS Pの異同が多く見られる。『リア王』全体の最後を締めくくる台詞が、Qではオルバニーに、Fではエドガーに割り振られていることは特に有名である。それらの異同を見てみると、S Pのみが別の人物に変えられているケースがほとんどだが、興味深いことに、エドガーとエドマンズの決闘直前に位置するリーガンとエドマンズの台詞には、表現の一部にも異同が見られる。

フランス軍を破ったエドマンズを、対等な指導者ではなく、あくまで部下として扱おうとするオルバニーに対して、リーガンはエドマンズを伯爵から公爵にするため、彼を夫とすることを宣言する。それを聞いたゴネリルが異議を差し挟もうとする部分がQでは次のように描かれている³⁾。

Q:

Gon. Meane you to inioy him then?

Alb. The let alone lies not in your good will.

Bast. Nor in thine Lord.

Alb. Halfe blooded fellow, yes.

Bast. Let the drum strike, and proue my title good.

Alb. Stay yet, heare reason, *Edmund* I arrest thee

On capitall treason, and in thine attaint,

This gilded Serpent, for your claime faire sister

I bare it in the interest of my wife,

(L1r 15-23; 5.3.78-85)

Fでも全体的な流れはQと同じである。しかし、引用中に見られるエドマンズ(Bastard)の2番目の台詞が、Fではリーガンの台詞になっている。ひとつ前のオルバニーの台詞から引用してみよう⁴⁾。

F:

Alb. Halfe-blooded fellow, yes.

Reg. Let the Drum strike, and proue my title thine.

Alb. Stay yet, heare reason: *Edmund*, I arrest thee

(TLN 3025-3027)

問題となる異同箇所だけを抜き出すと次のようになる。

Q: *Bast.* Let the drum strike, and proue my title good.

F: *Reg.* Let the Drum strike, and proue my title thine.

QとFのどちらをオリジナルと考えるべきだろうか。シェイクスピアがもともとQのようにエドマンズの台詞として書いたものを、後に、偶然または意図的にリーガンの台詞に変更されたのか、あるいは、もともとFのようにリーガンの台詞として書かれたものが、偶然または意図的にエドマンズの台詞に変更されたのだろうか。

どちらの台詞もシェイクスピアが書いたオリジナルとして通用するように見えるかもしれない。しかし、よく見ると、Qの台詞には問題がある。普通に解釈すると、グレッグがその滑稽さを指摘するように、エドマンズは、自分のタイトルが正当であることを太鼓、または鼓手に証明してもらうことになる⁵⁾。また、厳密に言えば、シソンが指摘しているように、エドマンズはまだこの時点で公爵の称号を手に入れていない⁶⁾。他方、Fでは‘proue’するのはエドマンズであり、彼は決闘によってタイトルの正当性を証明するよう促されている。また、現時点でのタイトルの所有者であるリーガンが‘my title’と呼ぶことにも問題がない。

一見もっともらしいが、問題のあるQの台詞が最初にあって、後に、作者自身、あるいは何者かが、SPをリーガンに変え、さらに‘good’を‘thine’に変えることで、Fのような問題のない台詞に書き換えられたと考えることには無理があるだろう。それに対して、Fのような問題のない台詞が、SPをエドマンズに変えて、さらに、‘thine’を‘good’にすることで、一見もっともらしいが、実は奇妙な台詞に変えられてしまうことは十分考えられる。この台詞の場合、変化の方向は、Q→Fではなく、F→Qの可能性が極めて高いのである。

F→Qの方向でSPと台詞の一部が変更されるケースでは、SPが先に変更されて、それに合わせて台詞中の表現が変更される場合と、逆に、台詞中の表現が偶然変更されて、それに合わせてSPが変更される場合が考えられる。しかし、現在検討しているケースでは、時々驚くべき読み間違いや誤植をするQの植字工であっても、‘thine’を誤って‘good’と植字することは考えにくい。綴りに全く似たところがないし、意味的な共通性も皆無だからである。ダシーは、植字工が、数行上の‘good’を植字してしまった可能性もあると指摘しているが、これは全く説得的ではない⁷⁾。このケースでは、SPが先に変更されて、それに合わせて台詞の一部が変更されたか、ほとんど同じことだが、SPと台詞の一部が同時に変更されたと考えるべきだろう。

SPの変更が先にある場合、偶然SPが変更されてしまった場合と、意図的に変更された場合が考えられる。リーガンとエドマンズの場合、SPが偶然変更されてしまい、それに合わせて台詞の一部が変更された可能性はあるのだろうか。Qの植字工がリーガンの台詞をエドマンズ(Bastard)の台詞と勘違いしてしまうことは考えられる。この辺りはエドマンズとオルバニーの台詞が連続しているので、突然出てきたリーガンのSPを、植字工が惰性でエドマンズのSPにしてしまうことは、ありえないことではないからである。

その場合、植字工は次のように植字したことになる。

Bast. Let the drum strike, and proue my title thine.

ここまでは十分考えられることだとしても、これを見た校正者が、この台詞が意味をなさないことに気づいて、‘thine’を‘good’に変更することには、あまり必然性が感じられない。普通に考えれば、この台詞は、直前の発話者であるオルバニーに向けられたものと理解されるはずである。この台詞が意味をなさないことに気付いたとしても、校正者は、‘my’や‘thine’といった代名詞の混乱や、S Pの間違いなど、いろいろな可能性を考えるだろう。そのような状況で、‘thine’に注目し、それを綴りも似ていない‘good’に変えることは、結果を知っていて想像するほど容易なことではない。修正後の台詞が、先述したように、滑稽で不正確なものになるのだから、なおさらである。

印刷所の校正者が、原稿を確認しないで、誤植を独断的に修正することは一般的だったと言われることがある。確かに、Qの校正者にもその傾向は見られる。しかし、同時に、Qの校正者が、問題のある個所で原稿を確認していたことも広く認められている⁸⁾。実際、5幕3場の一部が印刷されているシートKにも、訂正版固有のフレーズが存在するなど、校正者が原稿を参考にしてきた痕跡が見られる。本例の場合、理解に苦しむエドマンドの台詞に直面した校正者は、原稿を参考にすれば、S Pをリーガンに戻すという簡単な訂正で問題を解決できたはずなのである。

このように、リーガンとエドマンドのS Pの場合、まず、植字工の誤植によって偶然にS Pが変更されてしまい、その後、その間違いを糊塗するために、台詞の一部が変更されたとする説明も、あまり説得的ではないのである。そうなると、残された可能性としては、S Pと台詞の一部が意図的に変更されたケースだけになる。この場合、何者かが、意図的にリーガンの台詞をエドマンドのものに振り替えて、台詞にも微修正を加えたのである。単語一語の変更で問題を解決したかのように見えるけれども、先述したような別の問題を引き起こしてしまっている。結果的にこの例は、Qの印刷時に無理な変更が加えられた痕跡を示す珍しいケースとなったのである。

3 1幕4場のリアとケントのS P

1幕4場にはS Pの異同が4か所見られるが、このうちの2か所について次に分析してみよう。どちらもQとFでは、リアとケントのS Pが入れ替わっている。1番目は、追放を命じられたケントが変装をして、再びリアに奉仕を願い出る場面である。無礼な態度をとるオズワルドを叩き出したケントは、リアに気に入られて家来として認められる。そこに、しばらく姿を見せなかった道化が登場してくる。その部分から見てみよう。Qでは次のように描かれている。

Q:

Lear. Now friendly knave I thanke thee, their's earnest of thy seruice. *Enter Foole.*

Foole. Let me hire him too, heer's my coxcombe.

Lear. How now my prety knave, how do'st thou?

Foole. Sirra, you were best take my coxcombe.

Kent. Why Foole?

『リア王』のテキストに見られるSpeech Prefixの変更に関する一考察

Foole. Why for taking on's part, that's out of fauour, nay and thou can'st not smile as the wind sits, thou't catch cold shortly, there take my coxcombe; why this fellow hath banisht two on's daughters, and done the third a blessing against his will, if thou follow him, thou must needs weare my coxcombe, how now nuncle, would I had two coxcombes, and two daughters.

Lear. Why my boy?

(C4r 37-C4v 11; 1.4.93-106)

Fでも全体的な流れはQと同じである。しかし、引用中に見られるケントの台詞が、Fではリアの台詞になっている。ひとつ前の道化の台詞から引用してみよう。

F:

Foole. Sirrah, you were best take my Coxcombe.

Lear. Why my Boy?

Foole. Why? for taking ones part that's out of fauour,

(TLN 627-629)

単にS Pが異なるだけでなく、道化に対する呼びかけが、Qでは 'Foole'、Fでは 'my Boy' となっている。些細な点だが、S Pと同時に、台詞の一部にも異同が見られるのである。

本例から30行ほど進んだところに、やはりQとFの間でS Pの異同が見られる。娘に全財産を与えてしまったリアを道化が辛辣にからかう場面である。道化はナンセンスな教訓詩を披露する。その部分がQでは次のような展開になっている。

Q:

Foole. Sirra ile teach thee a speech. *Lear.* Doe.

Foole. Marke it vnclē, haue more then thou shewest, speake lesse then thou knowest, lend lesse then thou owest, ride more then thou goest, learne more then thou trowest, set lesse then thou throwest, leaue thy drinke and thy whore, and keepe in a doore, and thou shalt haue more, then two tens to a score.

Lear. This is nothing foole.

Foole. Then like the breath of an vnfeed Lawyer, you gaue me nothing for't, can you make no vse of nothing vnclē?

(C4v 18-26; 1.4.115-131)

Fでも全体的な流れはQと同じである。しかし、引用中に見られるリアの最後の台詞が、Fではケントの台詞になっている。

F:

Kent. This is nothing Foole.

Foole. Then 'tis like the breath of an vnfeed Lawyer,
you gaue me nothing for't, can you make no vse of no-
thing Nuncle?

(TLN 658-661)

以上2つのS Pの異同について、考えられる異同発生のパターンをまとめてみよう。最初に、どちらのケースもQがオリジナルだとすると、偶然であれ意図的であれ、Fの成立過程で次の(1)と(2)の変更が生じたことになる。

(Q→Fの場合)

(1) Q: *Kent.* Why Foole? → F: *Lear.* Why my Boy?

(2) Q: *Lear.* This is nothing foole. → F: *Kent.* This is nothing Foole.

次に、Fがオリジナルだと仮定すると、偶然であれ意図的であれ、Qの成立過程で、次の(3)と(4)の変更が生じたことになる。

(F→Qの場合)

(3) F: *Lear.* Why my Boy? → Q: *Kent.* Why Foole?

(4) F: *Kent.* This is nothing Foole. → Q: *Lear.* This is nothing foole.

2つのS Pの異同が見られる辺りでは、基本的にリアと道化の台詞が交互に繰り返される。道化の登場からゴネリルの登場までの間(Qで70行)に、リアと道化の台詞がそれぞれ10回以上繰り返される。それに対して、ケントの台詞はQで2回、Fでは1回のみである。常識的に考えれば、植字工がケントの台詞をリアに誤って割り振ることはあっても、リアの台詞をケントに割り振ってしまうことは考えにくいだろう。つまり、(2)や(3)の変更がなされた場合、それは偶然ではなく、意図的な変更の可能性が高いのである。このことから、2か所とも偶然にS Pが変更されたと考えられるケースは、(1)と(4)のペアに限定されることになる。

このような近い位置にあるS Pを、FとQの植字工が同時に取り違えてしまったと仮定することにはかなり無理があるだろう。さらに、(1)の変更には道化に対する呼びかけの変更も含まれている。単に、惰性でケントのS Pをリアにしてしまっただけではないのである。これを偶然として説明するためにダシーは、106行目にある‘Why, my boy?’というリアの台詞(Q/F共通)に注目した。つまり、Fの植字工の目は、98行目のケントの台詞を植字するとき、106行目のリアの台詞に引き付けられてしまったと考えたのである⁹⁾。しかし、Fの植字工は誤植個所に続く道化の台詞を正しく植字している。一度106行目に引き付けられた植字工の目は、107行目の道化の台詞には進まず、再度、99行目に戻って来ているのである。このような植字工の不思議な目の動きと、さらに、QとFの植字工による同時発生的不注意を想定しなければならないことを考えれば、(1)と(4)のペアで、2

か所のS Pが偶然に変更された可能性は極めて低いと判断することができるだろう。

純粹な可能性としては、2か所の異同のうち、一方は意図的に変更され、他方は偶然に変更されたということも考えられないわけではない。しかし、2つの異同の位置が近いことを考えれば、2か所とも同じ人物によって意図的に変更された可能性がより優先されるべきだろう。そうすると、残された変更のパターンは、(1)と(2)のペアで、2か所ともQ→Fという方向で意図的に変更されたケースと、(3)と(4)のペアで、2か所ともF→Qという方向で意図的に変更されたケースに限定されることになる。

2つのケースについて検討する前に、2番目の異同に関する、19世紀の研究者ホワイトの興味深い指摘について簡単に触れておきたい。彼は最初の異同についてはQが正しいと考えたが、2番目についてはFを支持して、道化に呼び掛ける際に、リアは決してフールと呼ばないと主張している。リアは、道化について語る際にはフールという正式の呼び名を使用しているが（「道化を呼んで来い」と言うときなど）、道化に話しかける際には、‘my boy’のような親しみを込めた呼称で呼んでいる。この1か所においてのみ、シェイクスピアがリアと道化の間に築いてきた感動的な関係性に無頓着であったとは信じられないとホワイトは述べている¹⁰。実は、2幕4場で娘二人に絶望したリアが退場するときにも、“O Fool, I shall go mad!” (2. 4. 286) と言って、リアはフールと呼び掛けている。また、3幕2場で寒そうな道化に同情するときも、リアは、“Poor Fool and knave” (3. 2. 72) と呼び掛けている。しかし、1幕4場に限定すれば、リアが道化にフールと呼び掛けるのは、Qに見られるこの箇所だけである。

それではまず、Q→Fという方向で意図的に(1)と(2)の変更がなされた場合を考えてみよう。ここで注意したいのは、(2)から明らかなように、Qの基になった原稿でシェイクスピアは、リアにも道化に対してフールと呼び掛けさせていることである。そうであれば、誰かが1番目のS Pを変更する場合、次のようにS Pのみを変更すればよいはずである。

Kent. Why Foole? → *Lear.* Why Foole?

ここから‘Foole’を‘my Boy’に変更することには、あまり必然性が感じられない。ホワイトと同じくらい、リアと道化の関係性に敏感な人物なら変更できるかもしれない。しかし、(2)から明らかなように、たとえシェイクスピアであっても、この‘Foole’を‘my Boy’に変更するの必要を感じなかった可能性が高いのである。結局、考えられる説明としては、S Pを変更した人物が数行下のリアの台詞をそのまま模倣したという、あまり説得力のないものになってしまうだろう。

次に、Fがオリジナルで、F→Qという方向で(3)と(4)の変更がなされた場合を考えてみよう。オリジナルにおいて、リアは道化に対して‘my Boy’と呼び掛け、ケントはフールと呼び掛けていることになる。何者かが、最初の質問をリアからケントに振り替えようとして、S Pのみを変更すると次のようになる。

Lear. Why my Boy? → *Kent.* Why my Boy?

これがケントの台詞として問題があることには誰でも気付くだろう。したがって、S P

を変更した人物が、その問題を解決するために、少し後のやり取りを参考にして、道化に対する呼びかけを、ケントにふさわしいものに変更することには必然性がある。

続いて、同じ人物は30行ほど進んだところで、ケントの台詞をリアに割り振る。今度は、次のように単純にS Pのみを変更している。

Kent. This is nothing Foole. → *Lear.* This is nothing foole.

この台詞の場合、変更した人物が、S Pを変更するだけで何ら不都合はないと考えたとしても不思議ではないだろう。ホワイトのように繊細なことを言わない限り、(3)の変更の場合のような明らかな問題点が見当たらないからである。このように、Fがオリジナルで、F→Qという方向で(3)と(4)の変更がなされたと考える場合には、(1)と(2)の場合のように、変更の過程で無理な想定をする必要がないのである。

以上のことから判断すれば、1幕4場に見られるリアとケントのS Pの異同についても、先に見たリーガンとエドマンドのS Pの変更と同様に、Fがオリジナルで、何者かによって意図的にF→Qという方向で変更された可能性が高いのである。

4 むすび

本論では、シェイクスピアの自筆原稿に基づいたテキストと考えられているQが、実は、何者かによって編集されている可能性があることを証明するために、1幕4場と5幕3場に見られるS Pの変更注目して分析を試みた。その結果として、どちらも、Fがオリジナルで、F→Qの方向への変更であり、それは偶然に起きることは困難で、何者かによって、意図的に変更された可能性が高いことが分かった。

最後に、そのように変更した意図について触れておきたい。おそらく編集者の狙いは、読者の便宜を考えて、登場人物の動きをできるだけ分かりやすく単純化することにあつたと思われる。リーガンとエドマンドの例では、リーガンが突然横から口を挟んで、「太鼓をたたかせて、私のタイトルがあなたのものであることを証明しなさい」と言う。ひとつ前の台詞はオルバニーの台詞なので、リーガンの台詞が誰に向けられたものなのか、即座に理解することは難しい。実際、現代版『リア王』の多くは、リーガンのS Pの後に「エドマンドに」というト書きを挿入している。Qの編集者は、リーガンのS Pをエドマンドに変更することにより、オルバニーとエドマンドのダイアログが続く、より単純な展開に作り替えたのである。先述したように、よく吟味すると、それはエドマンドの台詞としてはナンセンスなものになるが、第三者が横から口を挟むという、劇場では普通だが、読者は戸惑うかもしれない展開はこれで解消できるわけである。

1幕4場の「これはナンセンスだ」というケントの台詞をリアに振り替えたのも同じ理由からである。この場面は、道化がケントにスピーチを教えるところに、リアが横から口を挟むという、少し錯綜した展開になっている。そこでQの編集者は、ケントの短い台詞をリアに振り替えることにより、リアと道化のダイアログが続く、最初から道化がリアにスピーチを教えているような、より単純な展開に作り替えたのである。道化が、「よく聞きな、おじさん」と言ってリアにも注意を促すところが、この変更には都合だったこと

は言うまでもない。しかし、よく調べると、道化がケントではなく、リアに対して“Sirra”と呼び掛けるといふ、重大な不都合が生じていることも1番目の例と同様である。

1幕4場のもう1つの変更、すなわち、リアの「なぜだ」といふ質問をケントの台詞に変更したケースは、上の2つの例と矛盾するように見えるかもしれない。リアと道化の会話が続いているところに、横からケントに口を挟ませることになるからである。しかし、Fのままだと、ひとつ前の「鶏冠帽を取るときな」といふ台詞が誰に向けられているのか曖昧になる。文脈をよく考えれば、道化はここでケントに鶏冠帽を渡していることは明白である。しかし、リアと道化の台詞が交互に連続する文脈では、道化がリアに帽子を渡そうとしているように誤解されかねない。実際、Fに基づいて編集されたハリオのエディションでは、フールというSPの後に「ケントに」といふト書きが挿入されている。恐らく、Qの編集者も、原稿のままでは鶏冠帽の受け渡しが少し曖昧だと感じたのだろう。編集者は道化の台詞に対する返事をケントにさせることによって、鶏冠帽を受け取る人物をより明確にしたのである。

本論では1幕4場と5幕3場のSPの異同だけに絞って、FからQへの意図的な変更の可能性について分析してきた。筆者は、SPの異同だけに限らず、数行にわたるパッセージ、ト書き(Stage Direction)、さらに、より細かい表現の異同についても、Qの印刷前に行われた編集作業に起因するものが相当数に及ぶと考えている。ヴィカースは、QとFのテキスト間に見られるパッセージの異同について、それをQからの意図的な削除と考え、その目的として、テキストの印刷スペースの節約を指摘した。F→Qという方向の意図的な編集の可能性に焦点を当てたという意味で極めて重要な前進である。しかし筆者は、FからQへの意図的な変更の理由は、今回指摘した、話しの展開の単純化、明確化に加えて、他にもいくつか存在すると考えている。今後、編集の動機を網羅的に分析することにより、『リア王』テキスト問題のさらなる解明につなげたいと思う。

注

- 1) 四つ折り本と二つ折り本の原稿に関する議論については、以下の代表的エディションのイントロダクション参照。Jay L. Halio, ed., *The Tragedy of King Lear* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992). Jay L. Halio, ed., *The First Quarto of King Lear* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994). R. A. Foakes, ed., *King Lear* (London: Methuen Drama, 1997). Stanley Wells, ed., *The History of King Lear* (Oxford: Oxford University Press, 2000). QとFの原稿について最も簡潔に説明されているのは、René Weis, ed., *King Lear: A Parallel Text Edition*, 2d ed. (Harlow: Longman, 2010), 69-70である。
- 2) 例外はブライアン・ヴィカースである。彼は近著で、Fのみに見られるパッセージが、印刷所関係者によって意図的にQのテキストから削除されたと主張している。ヴィカースによれば、その目的は、テキストの印刷スペースを節約することにあった。Sir Brian Vickers, *The One 'King Lear'* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2016).
- 3) 『リア王』第一・四つ折り本からの引用はすべてW. W. Greg, *King Lear, 1608 (Pied Bull Quarto)*, Shakespeare Quarto Facsimiles Number 1 (Oxford: Clarendon Press,

1939; reprint, 1964)に拠る。参考のために引用の末尾に付した幕・場・行数はG. Blakemore Evans, ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1974)に拠る。

- 4) 『リア王』第一・二つ折り本からの引用はすべてCharlton Hinman, ed., *The Norton Facsimile: The First Folio of Shakespeare* (New York: Norton, 1968)に拠る。
- 5) W. W. Greg, *The Editorial Problem in Shakespeare* (Oxford: Clarendon Press, 1951), 94-95.
- 6) C. J. Sisson, *New Readings in Shakespeare* (London: Dawsons of Pall Mall, 1961), 243.
- 7) George Ian Duthie, ed., *King Lear* (Oxford: Basil Blackwell, 1949), 88-89.
- 8) Qの校正者が訂正の際に原稿を参考にしたことについては次の個所を参照。W. W. Greg, *The Variants in the First Quarto of 'King Lear': A Bibliographical and Critical Inquiry* (London: Bibliographical Society, 1940; reprint, New York: Haskell House, 1966), 141. Peter W. M. Blayney, *The Texts of 'King Lear' and their Origins*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), 245-252.
- 9) Duthie, ed., *King Lear*, 171.
- 10) Richard Grant Whiteの指摘についてはヴェアリオラム版の引用を参考にした。Horace Howard Furness, ed., *King Lear*, (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1877), 72.